

ワタン／祖国の「よそ者」が知るナイル川の汚染

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

中鉢夏輝

ナイル川が汚染されている。環境危機の時代とも言われる今日、プラスチックごみや工場排水、生活排水によって河川が汚染される様子は現地のメディアでも報じられている。世界最長の河川の一つとして有名なナイル川は、スーダンにおける日常生活、農業、漁業、娯楽に欠かせない。多くのスーダン人アーティストがこの川にまつわる作品を残している¹。ナイル川はスーダンの象徴と言える。ナイル川は首都ハルトゥームで、青ナイル川と白ナイル川という二つの大きな支流に分かれる。二つの支流の合流地点に「トゥティ島」という島がある。ここでもナイル川の汚染は見られる。トゥティ島の漁師たちは、日本人の「よそ者」である私に、どのようにナイル川が汚されているのかを教えてくれた。

2019年6月のある日、昼下がりがかった。私はトゥティ島の川沿いを散歩していた。道路に沿ってうっそうと茂る藪のなかに、タンクトップを着た男が入っていくのを目にした。藪の方には、獣道のように踏み鳴らされた道が見える。道は川辺につながっているようだ。向こうに何かがあるのか、確認だけして帰ろうと考え、私は男の後をつけていった。川辺に出ると、タンクトップ姿の男がいた。「ようこそ！」彼は笑顔で言った。近くに半裸の筋骨隆々な男と、10代半ばくらいに見える少年がいた。

タンクトップ姿の男は「名前は？どこから来た？アラビア語話せるのか？」と矢継ぎ早に質問してきた。私はたどたどしいハルトゥーム方言のアラビア語で答えた。いつの間にか、コップですくったナイル川の水と、アルミの皿に盛られた焼き魚で歓待を受けていた。焼き魚の白身がおいしかったことと、ナイル川の水をそのまま飲むことに私は驚いた。普通は、都市部の人々は衛生面を懸念してナイル川の水を飲まず、市販のミネラルウォーターを買って飲む。三人にとってナイル川の水が普通なのかもしれない。

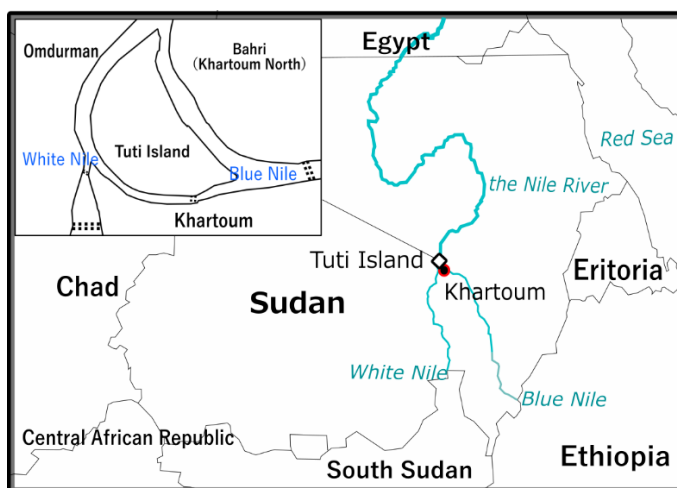


図1. スーダンおよびトゥティ島の位置

¹ 例えばハサン・ハリファ・アトバラウィー(1919-2007)は「こんにちは、愛する国よ (Marhabtain Baladna Hababa)」という曲を残している。歌詞は詩人シャムス・ディーヌ・ハサン・ハリファ(1933-)の詩である。「こんにちは、愛する国よ、愛するナイル、愛する草木...」という歌いだしを、ハルトゥームにある語学学校の先生がよく口ずさんでいたのを思い出す。

地べたに座り、右手で魚を食べながら、三人と会話をしていた。私が日本人であること、アラビア語を勉強しに一人で来たこと、スーダンの文化や社会に興味があることなどを話した。半裸の筋骨隆々な男は「ミスターMと呼んでくれ」と自称した。私が後をつけたタンクトップ姿の男はミスターMの弟である。兄弟の母親はエジプト出身である。二人の灰色の瞳と白みがかかった明るいトーンの肌を見るのはハルトゥームでは珍しい。ただし、彼らは自身をスーダン国民であり、トゥティ島の住民であると考えている。少年は、1年ほど前にダルフールからトゥティ島に来て、ミスターMのもとで働き始めた。ダルフール地域は、ハルトゥームから西方に800km以上離れたところにある。三人はナイル川で生計を立てている。行楽に来た人々をボートに乗せて収入を得たり、スズキ目の淡水魚ティラピアを漁網で獲ったりしている。過去にナイル川縦断をするオーストラリア人の冒険家が来たときには同行案内をしたそうだ。



写真1. 青ナイル川沿いの景色

漁師たちが、仕掛けた漁網を回収しに行くというので、ありがたくボートに乗せてもらった。川の真ん中まで進み、浮きの近くで止まった。三人は漁網を引き上げた。網には全長約15cmの魚が一匹だけ引っかかっていた。ぴくりとも動かない。ミスターMは魚を川に放り投げた。ミスターMは川に飛び込んだ。クロールで縦横無尽に泳ぎ回り、数分後にボートに戻ってきた。身体のあちこちに黒い斑点がこびりついていた。ミスターMは私の眼を見つめて「これを見てくれ。油だ」「この油は向こうから来ている」「向こうには工場があって、油を川に流している」と言い、上流の方を指さした。どの工場が、何を流しているのかはわからない。とはいえ、光のスペクトルのように濁った水面と、所々に浮かぶ黒い斑点は確認できた。私は「政府は対処しないのか」と聞くと、彼は「政府は何もしない」と否定した。ミスターMは「スマートフォンを貸してくれ」と頼んできた。手渡すと、彼は自撮りを始めた。黒と透明の水滴がしたたる胸から上の写真を撮っていた。ふざけている様子でも、気持ちが高ぶっている様子でもなかった。彼は眉間に皺を寄せながら「この汚れを世界に広めてくれ」「世界中の政府にこれを伝えてくれ」と告げた。そして再び川に飛び込んだ。



写真2. 漁網の回収の様子

日が沈みかけていた。ゆっくりと岸へ戻り始めた。ミスターMは煙草を吸っていた。遠くで水浴びをする人たちの声が聞こえる。私は「なぜそんなことを、よそ者の私に話すのだろうか」「彼らのために、日本人の私に何ができるのだろうか」とぼんやり考えていた。遠くから、二人の男が川沿いを歩いてくるのが見えた。二人は迷彩柄の服を着て、小銃を担いでいた。軍の者だろうか。ミスターMは急いで煙草を足元に伏せた。こちらに向かって軍の関係者らしき二人は「乗せてくれ、いくらだ」叫んだ。ミスターMが値段を言うと、二人はボートに乗らずに去っていった。スーダンでは、外国人旅行者の動向を秘密警察が追跡している噂を聞く。もしかすると、私のことを警戒した誰かが秘密警察に通報したのかもしれないし、そうではなく単に休憩に来ていたのかもしれない。どちらにせよ、緊張が走った瞬間だった。

スーダンでは1989年から約30年間、オマル・バシール大統領を筆頭に、与党の国民会議党、スーダン軍、準国軍的な治安部隊、警察、軍関連企業、諜報機関の国家情報治安局が権威主義体制を維持してきた。国民にとってこれが何を意味するかというと、結社や集会、表現などの自由が理不尽な理由で制限されているのである。体制批判をすれば自分と家族の安全の保証はない。公害問題の存在を国内で訴えたとしても、体制側の人間によって体制批判をしていると当局に報告されかねない。公害だけではない。人々は誰かが形成する監視の網を意識せざるを得ない。

2018年12月から、バシールの権威主義体制に対する反体制デモが起きていた。当初は、政府が発表した小麦や燃料への補助金の削減、それに伴うパンやエンジンの値上げ、通貨の価格下落などに対する抗議活動として始まった。それが次第に「革命」と呼ばれ、体制の打倒を目指すようになった。恐怖政治下の不満が一斉に爆発したように「革命」は瞬く間に全国に広まった。「自由、平和、公正！革命は国民の選択だ！」という叫びが連日あちこちで飛び交った。2019年4月11日、軍のクーデタによりバシールは失脚し、逮捕された。国民会議党も解散した。その後、文民と軍の交渉の末、2019年8月17日に暫定政権の発足にこぎつけたものの、2022年3月現在、軍は諸合意を反故にし、政権を掌握している。二転三転する状況下で、監視社会の影はまだ消えない。ミスターMだけではなく、自分の窮状を自由に国内で訴えられるようになるにはまだ時間がかかるだろう。

なぜナイル川の汚染を伝える相手が私だったのか。それは、「よそ者」の私がスーダンの監視社会を構成する一員ではないと認識したからではないか。ミスターMの立場に立ってみよう。国内の人間に汚染のことを話すと、それは環境政策批判、すなわち体制批判をしたという履歴が残る。話し相手が体制派だった場合、自分や自分の家族、友人に危害が及



写真3. 反体制デモの様子
(2019年4月、ハルトゥームにて)

ぶ。仮に体制派ではないとしても、人づてに秘密警察の耳に入る場合がある。自分に協力することで投獄されてしまうかもしれない。どちらにしろ、話せば話すだけ潜在的な敵を増やすことになる。

他方で、私はスーダンというワタン／祖国を構築するネットワークから外れた存在である。トゥティ島においてミスターMたちをとり囲む生活空間、つまりワタン／故郷のネットワークからも外れた人間である。むしろ彼らから見て、外の世界だけにリンクが繋がっている人間に見えたかもしれない。加害者と被害者のどちら側とも繋がりが無い。開発プロジェクトのために国家が調達してきた外国人専門家でもなければ、スーダン各地の人権問題取材するジャーナリストでもない。私とスーダン人とのつながりが明るみに出れば出るほど、言葉の選択に気を揉む場面が増えていただろう。私との出会いは、雁字搦めのスーダン社会のなかで排除も包摂も意識せずに現状を告白できる偶然の機会だったと考えられる。

今思い返すと、ミスターMはおそらく、私に何かをしてもらうためにナイルの汚れを訴えたのではない。汚染という事実はずっと前から存在している。彼らにとってこの公害問題における加害と被害の構造は分かりきったものであるし、汚染物質の成分を分析したところで何かが変わるわけでもない。環境団体を立ち上げようと私に提案することもなかった。では、なぜ汚染のことを伝えたのか。それは、「よそ者」²の視点から自分たちの生活を見直して、ナイル川の変化を再確認したからではないか。「よそ者」である私は焼き魚をおいしそうに食べ、ナイル川の水を飲むことを不思議がり、漁網の回収にありがたく同行した。漁師の視点から見て、これらは変哲もない日常である。私の様子を通じて、日常の一部を新しい視点で見直すきっかけになったかと思う。そして、その時の「気づき」として汚染の危険性を再認識したのではないだろうか。

河川の汚染のような環境問題はひと・自然間の関係の問題として語られることが多い。しかし、ミスターMたちは、この問題の底流として存在するひと・ひと間の問題を示してくれた。権威主義体制のもので構築された監視網がナイル川の汚染問題を明言できなくしている。そうした極限状態のなか、彼らがその問題を指摘したのは、私が外国人の「よそ者」であり、何かしらのアクションを展開しない客人に見えたからだと考えている。つながりの弱さゆえの信用とも言えるだろう。ミスターMたちと出会った数日後、スーダンの情勢悪化を理由に、私は大学の指示に従って国外退避しなければならなかった。結局、彼らと再会できていない。私はこの日の出会いを無駄にしない。ナイルの汚染は、今でも人々

² 環境倫理学者の鬼頭秀一は、環境運動の生成過程における「よそ者」の存在に着目した分析枠組みを提起している〔鬼頭 1996: 246-8, 1998〕。「よそ者」は、地域に埋没した生活では得られにくい普遍的な視野を、その地域に提供する。そして、その地域は、新しい視点を獲得することで、自分たちの自然とのかかわりの特殊性を再認識・再構築する。さらに、地域と「よそ者」は、互いの相互作用を通じて、二項対立的な構成から流動的に転じていく。ただし鬼頭は主に、地域に積極的にコミットする専門家や移住者を想定している。

の生活を脅かしている。スーダン、そしてトゥティ島との繋がりが切れた「よそ者」にも、できることがあるはずだ。

【参考文献】

鬼頭秀一. 1996『自然保護を問い直す』筑摩書房.

———. 1998「環境運動／環境理念研究における「よそ者」論の射程——諫早湾と奄美大島の「自然の権利」訴訟の事例を中心に」『環境社会学研究』4: 44-59.

— 中鉢 夏輝 | Chubati Natsuki —

1997年、埼玉県生まれ。東京外国語大学国際社会学部卒業(2021年)、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士前期課程(在籍中)、2019年にエジプト・カイロで3か月間の語学研修(「アラブ・アカデミー」)、スーダン・ハルトゥームで4か月間の語学研修(「スーダン・オープン大学付属アラビア語センター」)。

趣味：登山、まち歩き

専門：地域研究、環境社会学、イスラームと環境倫理

現在の研究(コメント)：最近は、イスラーム世界の宗教指導者が実施する説教や植樹活動、ポッドキャスト、歌の作成など環境問題に対する様々な「イスラーム的」な取り組みを対象に、その仕組みや意義について研究しています。熱帯・乾燥帯のアジア・アフリカ諸国に住まう者の視点から、世間一般の「環境問題」に対する見方を問い直します。この視点の重要性に気づかせてくれたのは、トゥティ島の漁師を始めとする多くの方との出会いでした。

